

IV. 総括

1. 「御本寺」について 現状と展望

山科本願寺は、山科の発展に伴いインフラ整備や民間開発によりその姿を垣間見ていたが、近年では史跡整備を視野に入れた発掘調査も行う中で、中心部である「御本寺」の様相が明らかになりつつある。しかし、主要堂舎である御影堂や阿弥陀堂の存在は確認できておらず、その様相は明らかではない。これまでの研究や調査成果を整理し、今回の調査成果を踏まえ、それぞれの現状の整理と今後の展望を述べる。

土塁について

山科本願寺をめぐる土塁については、1917年に京都府史蹟勝地調査会により、古地図のほか踏査による地形把握が行われており、当時の土塁や堀の様相をうかがい知ることができる²⁷⁾。この後、1970年に井口尚輔氏が地表面観察をもとに、山科本願寺に関わる絵図や地籍図の活用、発掘調査成果、地元の方への聞き取り成果も援用され、寺内町の正確な復元(図107)が試みられた²⁸⁾。また同氏は「山科古図」を入手し、府立洛東高校に収めた。この古図は山科本願寺を知るうえで必要不可欠なものとなっている。1985年には岡田保良氏・浜崎一志氏が先述の絵図や史料以外の史料も追加し、当時行っていた

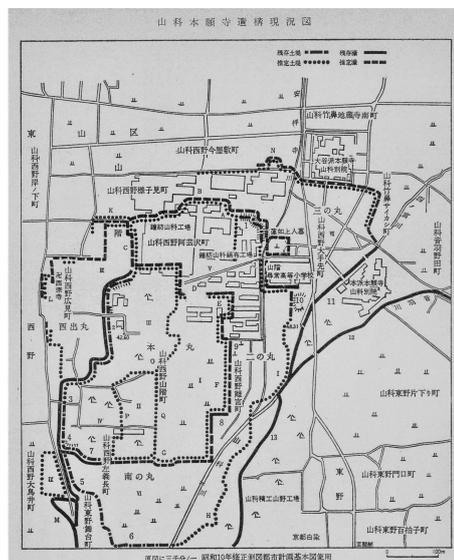
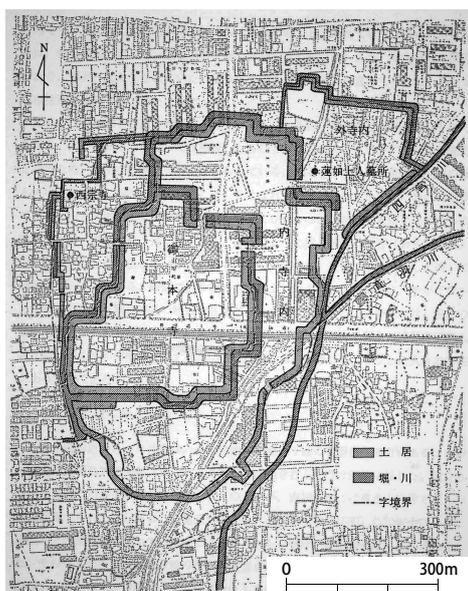


図107 井口氏復元案(1:6,000)
※註28より転載

復元図(洛東高校本、西宗寺本による)



復元図(光照寺本による)

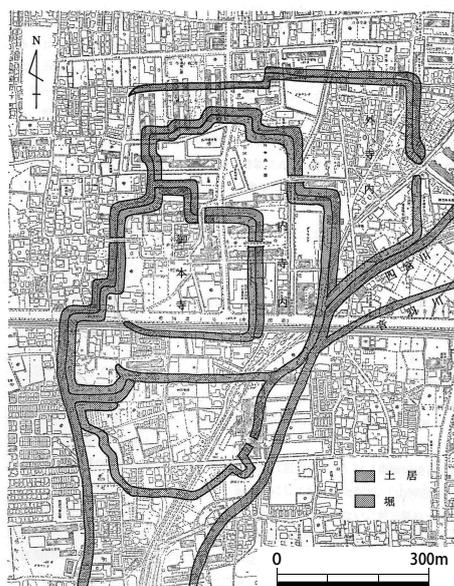


図108 岡田・浜崎氏復元案(1:15,000) ※註29より転載

発掘調査成果や当時現存していた土塁の地形測量成果をもとに検討を行った結果、2案の異なる「山科寺内町復元図」(図108)を提示した²⁹⁾。復元案は、地図上にあてはめられ、山科本願寺が地図上で表現されたことは、当時、画期的であったと考える。この復元案は、現在でも山科本願寺を語るうえで欠かすことはできない。提示された2案は土塁の形状や外寺内の規模など詳細な相違が様々あげられるが、一番の大きな違いは、御本寺南辺部分にあたる土塁の配置であり、この配置の相違は、御本寺や内寺内の範囲や規模に大きく関係する(図109)。ここで、打ち出された2案の復元案は現在でも用いられることが多く、その解明に向けて、各研究者が多方面からの検討が行われている。特に、福島克彦氏³⁰⁾、

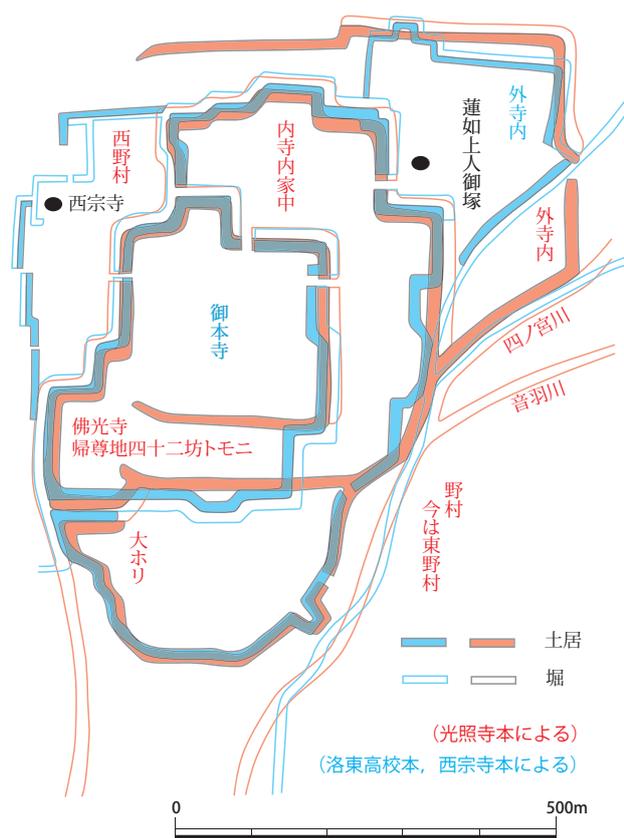


図109 岡田・浜崎氏復元案重ね図(1:10,000)

草野顕之氏³¹⁾、中井均氏³²⁾があげられる。福島克彦氏は、明治から大正の頃の地籍図を基に土塁の痕跡を復元したものを示し、西側は単調だが、東側には折れがあり複雑であること、また岡田・浜崎氏案の両案はどちらも正しいという立場から、正誤でなく、時期差を表しており、寺内町が拡張とともに土塁も変形していることを指摘している。草野顕之氏も、蓮如が亡くなった時期(1499)にはまだ御本寺部分のみで、その後、実如没(1525)までの間に寺域を拡張していることを指摘、中井均氏も土塁は改修・改変されていると指摘した。このように1998年の時点ですでに山科本願寺が描かれている絵図の差異は、正誤ではなく、山科本願寺の一過程を示すもので、我々が目にしている現況に至るまでいくつかの変遷があるであろうことが認識された。無論、発掘調査からもアプローチは行われている³³⁾。特に、平成22～24年度におこなった発掘調査(17次調査)で御本寺西辺の土塁構築土出土遺物及び土塁下層で確認された遺構の年代から、現状の土塁の構築年代が蓮如死去後であることを裏付ける資料³⁴⁾が確認された。またこの調査で土塁の最下部の盛土が、初期築地の基礎部分である可能性も考えられたが、基礎として利用するには締りがなく、ぜい弱なため、検討を要する。平成30～令和元年度に行った発掘調査(23・24次調査:本報告)でも、土塁構築土から出土した遺物の年代は造営当初ではなく、後半頃を示しており、遺存している御本寺北西部から西辺、南西部付近の土塁の構築時期を明らかにすることができた。

また復元案の一番の大きな違いが見いだせる御本寺南辺部分にあたる部分では、平成27年に発掘調査(22次調査)³⁵⁾が行われ、東西方向の大溝(堀229)の埋没後に山科本願寺期の埋甕遺構が展開しているのが確認された。この時、堀229が北側から南側に向けて人為的に埋め戻されて

いること、この埋め戻し土から山科本願寺期の遺物が出土していることなどから、土塁を取り壊して埋めた可能性が指摘されている。22次調査の北側に位置する令和3年に行われた発掘調査(26次調査)³⁶⁾でも東西方向の大溝(堀10・70)が確認された。堀10・70とも堀の埋没後に山科本願寺期の遺構が展開している。ともに遺物量は少ないものの、平安時代や室町時代の遺物が出土し、堀10は南から北へ、堀70は北から南へ、人為的に埋め戻されていることが確認されている。堀70は10次調査で確認されている堀7の延長線上にあたることから、同じ堀である可能性が示され、寺域内が連続ないしは断続的な堀で区画されていたことが想定されている。両溝が併存していたどうかは遺構の重複関係からは明らかではないが、堀10埋没後に室町時代(山科本願寺造営以前)の墓65が展開しているため、堀10については山科本願寺造営以前もしくは蓮如が造営した初期の様子を示す遺構として注目できる³⁷⁾。26次調査でも堀10や堀70などが確認され、考古学的見知から、光照寺本の「御本寺」の南辺を囲う土塁の存在が近年明らかになりつつある。

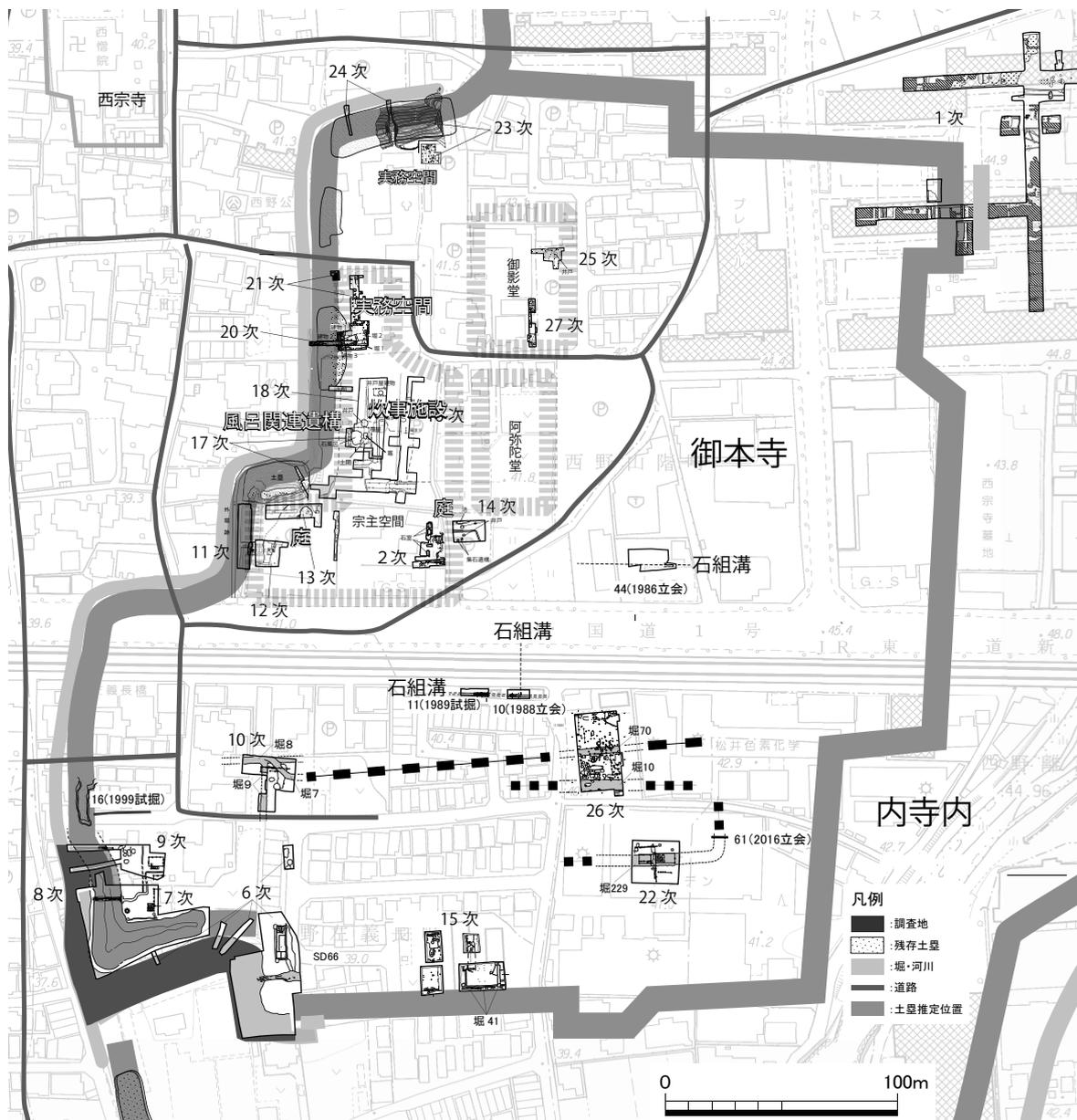


図110 御本寺内遺構配置図(1:3,000)

御影堂の想定位置と当初の本願寺について

本願寺の主要部である御本寺については、西川幸治氏³⁸⁾が、「蓮如上人御一期記」の「明応八年三月中旬 安芸法眼御託言可申上とて、山科の八町の町に上洛ありしか共、申次人もなし」や本願寺焼き討ち後の「天文日記」の「海老名将監此間申候、野村寺中地子事、色々申し候へ共、出がたく候よし申放候。然者、本役落に成べきと分別せしめ候。更に執心なき事に候」とあり、「この坊跡、御堂・亭・中為（中居）にいたるまでは、八町まちにて候」の記載中の「八町の町」や「八町まち」部分を、集住している「まち（町）」が8か所、存在すると考えた。また草野顕之氏³⁹⁾は同じ史料を用いて、「まち（町）」をまとまりではなく、区画の単位と捉え、御本寺の具体的な規模を想定し、その範囲を示した。草野氏が示した範囲は、光照寺本の絵図に表される御本寺の広さに近いことが示された（図111）。また草野氏は高橋康夫氏から、方一町＝四町町として、八町まちは、方一町の二つ分のことと解釈できるのでは？という指摘を基に、想定すると当初想定された範囲の半分程度の広さになるものの、堂舎の利用方法から、想定範囲規模の差異は許容範囲内とされており、御本寺の範囲を絞ることができる。

またこの御本寺内の様相については、史料や絵図などから明確な配置がわかるものはない。御本寺内で行われた発掘調査（2・11～14・16～18次調査）では、南側で庭や池、風呂関連遺構のほか、北側で井戸から多量の炭化米が確認され、炊事施設や土蔵の存在が想定されている。このように御本寺西側宗主の私的空間やそれを支える実務空間が広がっていたことが明らかになり、『都名所図会』（安永9年製作）に書かれた西本願寺の建物配置や『御文』などで確認できる

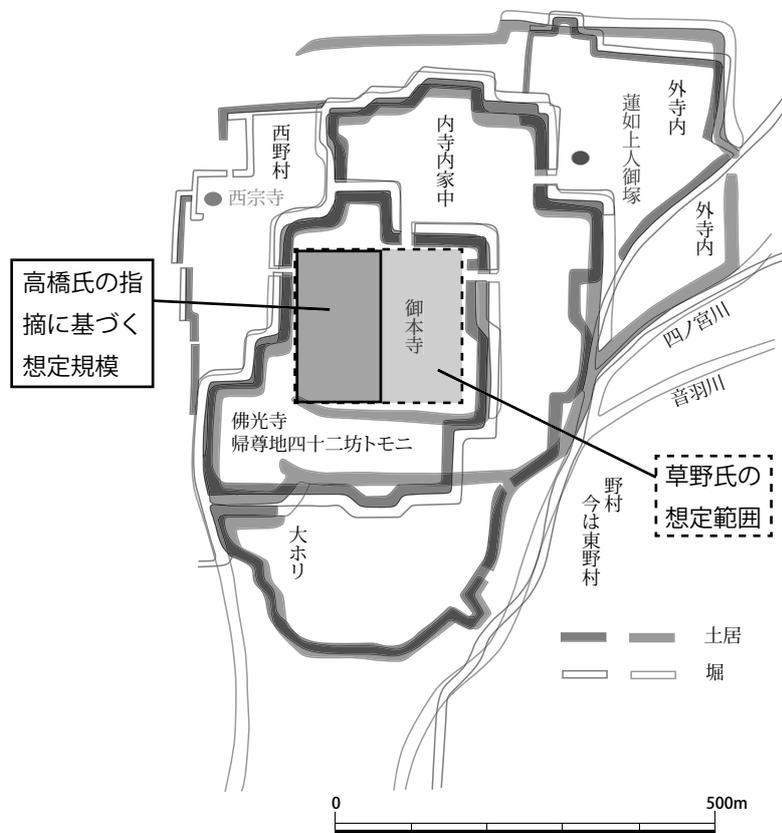


図111 御本寺推定範囲（1：10,000）

施設との対比から、御本寺や阿弥陀堂の配置の想定が行われた（図 49）⁴⁰⁾。この後に実施した発掘調査（20・21 次調査）でも掘立柱建物などが確認され、実務空間が北側に広がっていることが確認された。今回の発掘調査（23 次調査）でも、整地を伴う改変や柵に伴う柱穴や土坑などが土塁裾にまで及んでおり、実務空間が広い範囲に及んでいることが明らかになった。また御影堂想定範囲内を対象とした発掘調査（25 次調査）では、御影堂に直接関係する遺構や遺物は確認できなかったものの、井戸や整地を確認した。この様相は 23 次調査に似ており、23・25 次調査で確認した整地土は、焼き討ち前に大規模な造成が行われた痕跡と考えている。山科本願寺の造営については、その造作日が分かるほど詳細な記録が残っている。造営当初から土地造成が行われていたことや、早い段階で造営された主要堂舎である御影堂や阿弥陀堂の建立過程についての記載はあるものの、御影堂や阿弥陀堂の建て替えや移転、改修などの記載は認められない。23・25 次調査で確認した整地土は遺構変遷上、寺域拡張に伴う痕跡と考えられることを踏まえると、この整地土を確認した範囲以外に、御影堂の想定範囲（図 112）を絞ることが可能になる。と同時に、造営当初から存続する主要堂舎の位置が特定できれば、山科本願寺の造成当初の様相を知る手掛かりにもなると考えられる。

中心部である御本寺については、史跡の追加指定に向けた調査が始まって以来、顕著な調査成果が挙げられ、遺跡の形態や変遷についても知見を得ている。今回の調査でも新たな知見を得ることができ、様相の一端を垣間見ることができた。今後も山科本願寺の遺跡の重要性から史跡の追加指定（図 113）も踏まえ、中心部である御本寺の調査を進め、様相解明に努めたい。

（奥井智子）

註

- 27) 橋川正「第五 山科本願寺及其遺址」『京都府史跡勝地調査会報告 第七冊』京都府，1926。
- 28) 井口尚輔「中世城郭伽藍“山科本願寺”」『日本歴史』265，1970。
- 29) 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告第 8 集』国立歴史民俗博物館，1985。
- 30) 福島克彦「城郭研究からみた山科寺内町」『戦国の寺・城・まち - 山科本願寺と寺内町 -』山科本願寺・寺内町研究会 法藏館，1998。
- 31) 草野顕之「山科本願寺・寺内町の様相 - 蓮如の時代とその後 -」『戦国の寺・城・まち - 山科本願寺と寺内町 -』山科本願寺・寺内町研究会 法藏館，1998。
- 32) 中井均「戦国の城・山科本願寺」『戦国の寺・城・まち - 山科本願寺と寺内町 -』山科本願寺・寺内町研究会 法藏館，1998。
- 33) 山科本願寺において土塁の調査は 14 例あり、土塁の規模や構築方法などが示されている。以下に土塁の調査事例の概要を記す。また（ ）には、表 3～7 の対応No.を記す。
 - 1 (掲載なし)：「1 区 No.49～2 区 No.78 間で堀と土塁を検出した」「しかし、立会調査の成果と絵図の関係をみると、土塁と堀の検出が予想された 2 区の No.51～52 間で、遺構が検出されないなど問題も残った。・・・これまでの調査によって各所で焼土層は見ついている

が、焼けた瓦は未発見である。」との記載のみ。詳細不明。※広域調査の為、一覧表には掲載せず。

「10 山科本願寺」『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1989。

- 2 (表4-10)：内寺内の東側南北方向土塁を確認。基底部幅 26.5 m，高さ 3.2 m。残存上面 15.4 m。土塁断面観察から，西側（内側）に拡張していることを確認。拡張部分の構築土より土師器皿，播鉢が出土。
- 3 (表3-6次調査)：断面で東西方向の土塁痕跡をかりうじて確認。土塁想定位置に遺構の展開が認められないため，土塁が存在していたと想定。途切れている部分については，出入り口を想定。
- 4 (表3-7次調査)：御本寺の南西隅部分。高さ 5～6 m，基底部幅は 18 m で，上面に幅 2 m の平坦部あり。斜面の最大傾斜角は 45 度。コーナー部がやや高く平坦面も広いので，ここに櫓も想定可能。柱穴などは未確認。西側土塁上面では 5 基の柱穴を確認でき，構造物を想定可能。西側土塁には暗渠を確認。石組みの内法幅 0.3 m，高さ 0.25 m。掘方は確認できていない。
- 5 (表3-8次調査)：御本寺の南西隅部分。東西方向と南北方向の土塁を確認。7次調査の西側にあたり，寺内では最も低い場所。暗渠の内部に灰や焼土が 3 cm ほど堆積しているのを確認。
- 6 (表4-13)：南北土塁の残存部分の削平に伴い立会。現在は滅失。
- 7 (表3-9次調査)：御本寺の南西隅部分。7次調査の北側。調査区西端で南北方向の堀，南北方向の土塁基底部を確認。基底部幅は 15.0 m，残存高は 1.5 m。基底幅 6 m，高さ 1.5 m の核を設け，内側へ積み上げていく。東西方向の暗渠も確認。土塁構築土を掘り込んで設ける。暗渠幅は検出長 2.5 m，内法幅が 0.15 m，高さが 0.15 m，側石は 1 段積み。幅 0.7 m の掘方をもうける。底石あり，蓋石あり。核を築き，内側に土を積む。透水性のある砂礫まじりの層と土の崩落を防ぐ粘性のある層を交互に重ねるとするのは，他の事例と同じ。
- 8 (表3-11次調査)：御本寺西側中央の南北方向の現存土塁。地形測量と一部断割り。最下層に無遺物の砂礫層を確認。この砂礫層は締りがなから，古い時代の氾濫堆積層と考えられている。この砂礫上面に整地土が積まれる。下部は水平，上部は斜め堆積になることを確認。試掘調査区北壁の土塁構築土，調査南壁の土塁構築土から土師器皿を確認。
- 9 (表3-12次調査)：御本寺西側中央の南北方向の現存土塁内側裾部。土塁を東西に横断する石組み暗渠を確認。基底部幅 13.5 m，濠側傾斜角は 35 度。内側傾斜角は 20～25 度。核を築き，内側に土を積んでゆく。透水性のある砂礫まじり層と土の崩落を防ぐ粘性のある層を交互に重ねることで，強固な土塁を築く。土塁構築土からは土師器皿が出土。13次調査で暗渠の口を確認。12・13次調査あわせて，検出長は 9.5 m。底石を南北に 2 石並べて敷き，側石は 4～5 段積む。天井石は 2～3 石並べる。内法幅 0.4 m，高さ 0.6 m。底の勾配は，(内から外へ) 2.5～3 度。13次調査の泉遺構からの排水施設と想定。土塁を積み上げた後，切り込んで暗渠を構築。暗渠掘方から完形の土師器皿が 1 枚出土。直線的に開き，圏線あり。

この暗渠は、他の暗渠と比べ規模が大きい。石組み溝や暗渠を壊して整地し直し、土塁改修をしていることも明らかになった。

- 10 (表3-17次調査)：17-1区(南北土塁)は用水路沿いの現存土塁屈曲部。中央から内側。内側比高差は3.7m。土塁裾の内溝を確認。土塁中央部構築土の下で埋納遺構(SK2160:骨と短刀)、土塁内側裾構築土下で土坑を確認。土塁構築土直下で多量の土器と炭化物を含む層を確認。1区では土塁構築土から、山科本願寺期の遺物を確認。ここでの断面観察で、基盤層+土壌化層→本願寺造営時の整地層→台形状に盛土を構築(東西約5.7m、高さ0.4m。シルトを化粧土とする。しかし締りが悪く、土塁と別物の可能性がある。)→外側に核を造る。→内側へ積み上げていく、を確認。台形状に盛土を構築：当初遮蔽物の基礎か？その後、土塁を積み上げるという工程を確認。土塁の構築年代が造営時期より大幅に遅れる可能性が高くなった。
- 11 (表3-20・21次調査)：20次調査は、南北方向土塁の内側の形状把握。整地土上面に土塁構築。内傾斜は40度。21次調査は20次調査区を再掘削。裾部を一部断割り。下層に掘り込みを確認。基底部幅は13m、残存高は2m。
- 12 (表3-23次調査)：奥田家北側現存土塁測量、切通断面測量(本報告)
- 13 (表3-24次調査)：奥田家北側現存土塁断割り調査(本報告)
- 14 (表6-35)：21次調査の南側。南北方向土塁の断面観察と測量。地山は確認できず、土塁構築土のみを確認。
- 34) 17次調査：「IV山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成23年度』京都市文化市民局、2012。
- 35) 『山科本願寺跡・左義長町遺跡—建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』イビソク京都市内遺跡調査報告第14輯 株式会社イビソク、2017。
- 36) 『山科本願寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-5 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2022。
- 37) 22次調査の堀229の北側に土塁が伴っている可能性は、既に指摘されている(佐藤好司『山科本願寺跡・左義長町遺跡—建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』イビソク京都市内遺跡調査報告第14輯株式会社イビソク、2017。)
- 38) 西川幸治「都市史のなかの中世寺内町」『国立歴史民俗博物館研究報告第8集』国立歴史民俗博物館、1985。
- 39) 8町は24,000坪=79,200㎡=約281.42m×約281.42m 一辺約281.42mの範囲を想定。草野顕之「山科本願寺・寺内町の様相—蓮如の時代とその後—」『戦国の寺・城・まち—山科本願寺と寺内町—』山科本願寺・寺内町研究会 法蔵館、1998。
- 40) 柏田有香・馬瀬智光「V山科本願寺跡 7 総括」『京都市内遺跡発掘調査報告平成24年度』京都市文化市民局、2013。なお、現状示している主要堂舎の想定図は、現在の東本願寺に現存する最大規模の構造物で想定されている。

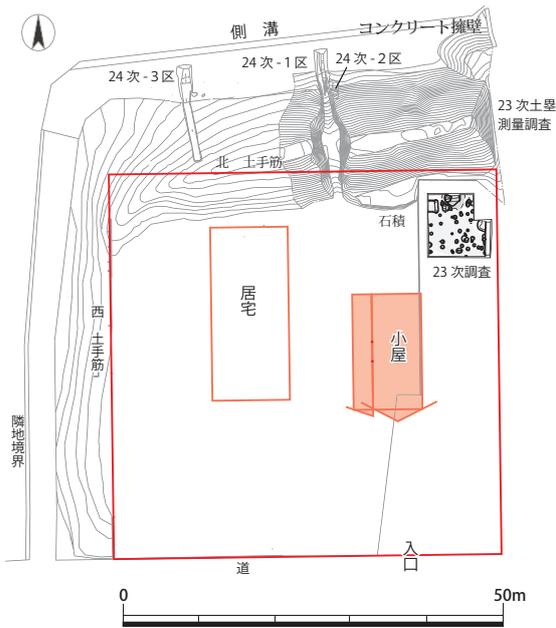


図116 奥田家【第3期】(1:1,000)

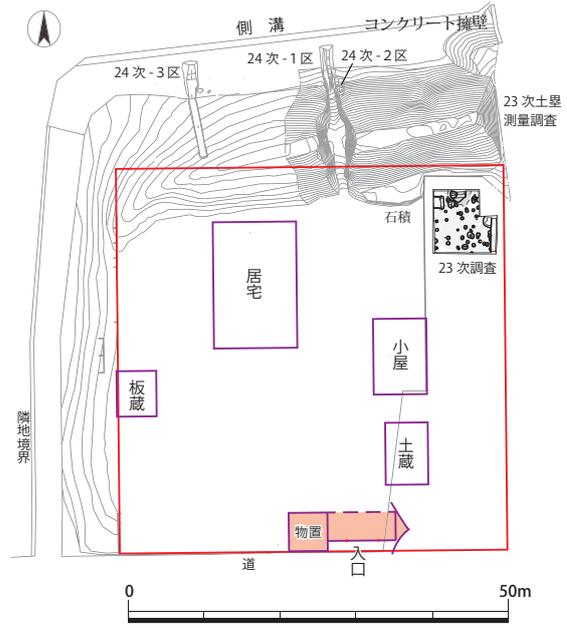


図117 奥田家【第4期】(1:1,000)

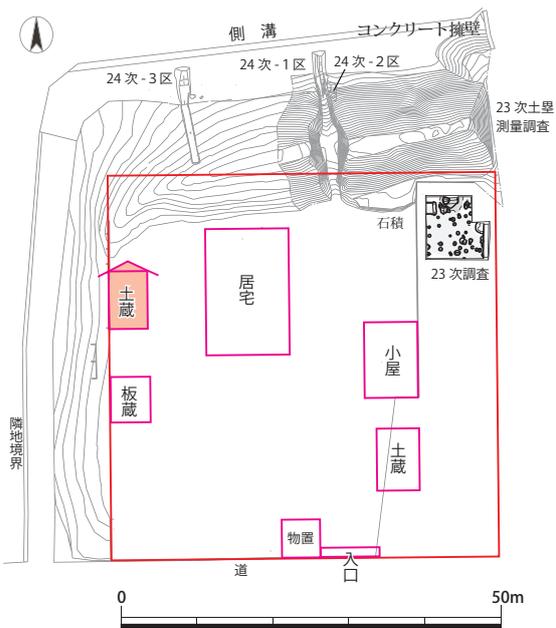


図118 奥田家【第5期】(1:1,000)

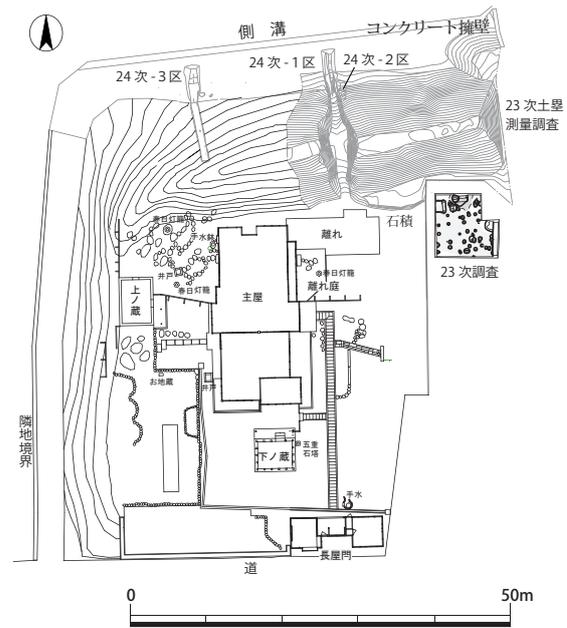


図119 奥田家【第6期】(1:1,000)

東西方向に屈曲しており、安祥寺川の変遷を見る上でも貴重である。

奥田家は、平成28年に追加指定・名称変更を行った「史跡山科本願寺跡及び南殿跡」の追加指定地に所在した奥田家(分家)と共に、山科本願寺の「御本寺」の北西部、ちょうど御本寺を囲む土塁と堀に近接した場所に住まいを有しており、居住者としても本願寺の跡地を管理し続けた旧家であり、以下に説明する江戸時代の奥田家の変遷においても一貫して土塁と堀が奥田家と一体であったことがわかる。

奥田家【第1期：明和6年以前】(図114)

奥田家文書ですでに調査されている161点の内、最古のものは天和3年(1683)の西野村百姓の返答書⁴³⁾であり、系図上でも天和2年に初代が没していることから、17世紀中頃に野村の地に入ってきたことがわかる。中世以来の郷土が野村にいるにも関わらず、西宗寺や三之宮の総代を努めていること、過去帳を元にした系図では、初代「清空」～四代「清雲」まで「清」の着く僧名である⁴⁴⁾ことから、西本願寺にゆかりがあるのかもしれない。

17世紀中頃～明和6年までの土地利用については不明な点が多いが、明和6年(1769)の普請願書に既存建物であることを示す墨引きの建物、同様に既存建物で「板蔵」「土蔵」「雪隠」「開き8尺」の入口が描かれており、南北6間、東西3間半の「居宅」を中心とした宅地であったと考えられる。

なお、明和6年の増築以前の「居宅」を描いた指図が2通残っている。作成年次不明であるが、梁行と桁行、母家の南西部分に方形の張り出しを持つ点などの特徴を共有しており、第1期の復元図の居宅として採用している。

奥田家【第2期：明和6年(1769)～】(図115, 図版25-2)

明和6年の普請願書を基礎とした復元図である。同普請願書には「居宅南ノ方江建継御願」と題され、端裏には「明和六年丑四月廿五日 普請出来御見分相済」と書かれている。この普請願書以外の作成年次の明らかな3通の普請願書との大きな違いは、敷地の形状である。天明5年(1785)以降の願書が「東西貳拾間」「南北貳拾間」の正方形の宅地であるのに対し、当願書はL字形をした宅地であり、記述されている間数から敷地を復元すると、明らかに土塁を敷地内に取りこんでいる。

また、この願書には「西隣頼人九左衛門堀」と書かれており、奥田家代々が名乗る「九左衛門」が所有する「堀」として認識されていることがわかる。

奥田家【第3期：天明5年(1785)～】(図116, 図版26-1)

明和6年の普請願書にも描かれていた居宅の東方にある「小屋」の建て替えに伴う普請願書に基づく。御奉行様宛ての庄屋九左衛門からの願書であり、「禁裏様御料 城州宇治郡山科庄西野村 願主 九左衛門」と書かれている。この願書の宅地西側と北側には、それぞれ「土手筋」と記述されており、西側と北側の土塁が宅地の外側になり、20間四方の宅地となる。この願書には「居宅」と改築予定の「小屋」しか建物は描かれていないが、他の願書も含めて全ての建物を記す必要はなく、目的とする建物がわかれば良いと考えられる。それを端的に示すのは、南には「道」と記されているが、道から宅地に入る「入口」はどこにも描かれていない。なお、小屋は現在の敷地には残っておらず、復元に当たっては、現在の敷地測量図に描かれた長屋門と主屋を結ぶ石畳から東に延びる石畳の終点とした。この東に延びる石畳は沓脱石状の方形の石で終わっており、建物も何もない場所である。最終的に解体されるまで小屋の位置は変わっていないと考えたため、1期及び2期の小屋の配置も同じ場所とした。

奥田家【第4期：寛政5年（1793）～】（図117）

寛政5年に長屋門建築のために「御奉行様」宛に出された普請願書を基礎としており、「城州宇治郡山科庄西野村 願主 年寄 九左衛門」と書かれている。この願書では宅地西側と北側を「土手筋」や「堀」などと記述されることは無くなっている。ただし、宅地の規模は第3期と同様、20間四方であり、居宅の西方には「板蔵」、東方には天明5年に建て替えられた「小屋」に加えて「土蔵」が描かれている。絵図に描かれた長屋門は現在残る長屋門とは形状は異なるが、長屋門の西に取り付く「物置」と合わせると、現在の長屋門とほぼ同じ規模になる。

奥田家【第5期：寛政10年（1798）～】（図118，図版26-2）

寛政5年の長屋門の増築に続いて、「居宅」の西方、「板蔵」の北に「土蔵」を増築するために、御奉行様宛に出された普請願書を基礎としている。願書には「城州宇治郡山科庄西野村 年寄 百姓九左衛門」と書かれている。この蔵は現在も残る「上ノ蔵」であると考えている。この願書では長屋門が「入口」と「物置」に簡略化されて描かれている。第3期，第4期と同様，方20間四方の宅地として認識されている。

奥田家【第6期：明治以降（1868）～】（図119）

寛政10年の普請願書に描かれた建物の内、現在も残っているのは「居宅（主屋）」「土蔵（上ノ蔵）」の2棟のみである。それまでの普請願書で描かれていた「居宅」の規模と内部の間取りは、明治以降の度重なる改装を受けても近似している。このことから現在の主屋は、少なくとも明和6年以前に遡る。長屋門は規模も等しく、位置も同一の場所であるが、明治の初め頃に何らかの普請が加えられたと伝えられることから、明治初期の建物と考えられている⁴⁵⁾。図119にある「下ノ蔵」は明和6年以前の願書や作成年次不明の指図に描かれていた「土蔵」の位置と一致するが、奥田家の南東側の吉井家の土蔵を明治末年～大正初期に曳家したと伝えられており、かつての土蔵と同じではないと考えられている⁴⁶⁾。

奥田家が「御本寺」に位置し、「土塁」と共にある価値

奥田家が江戸時代中期以降、御本寺北西角に現存する土塁や堀を宅地内に取り込み、または所有権を有しながらも「隣地」として取り扱ってきた歴史を普請願書とともに見ることができた。土塁は、明治以降も奥田家所有地として管理され、主屋西側の庭園の「築山」としての機能を有しており、大切に維持管理されている。

慶長3年（1598）2月3日付の「比留田家文書」の本願寺領内（以前の山科本願寺の寺域）への地藏堂屋敷移転について、西野村が申し入れた文書⁴⁷⁾には、現在も残る松井家、中島家などが署名している。さらに、当地は蓮如上人に寺地を寄進した海老名氏の本拠でもある。また、地域では最古との伝承をもつ奥田家南東に敷地をもつ吉井家もあるにもかかわらず、17世紀中頃に移転してきた奥田家が17世紀末の天和2年には年寄と記述され、その後、山科郷土、庄屋として存続し、西宗寺及び三之宮の総代を努めていることは極めて重要である。現在の主屋に残る近衛家から贈られた「襖」、勝海舟や福沢諭吉らと交流のあった李氏朝鮮時代の政治家であり朝鮮貴族であった朴泳孝による「扁額」の存在など⁴⁸⁾を考え合わせると、本願寺領及び禁裏御料であった

旧山科本願寺の寺域の管理をするために、西本願寺などから送り込まれた坊官が土分を得た可能性が考えられる。

山科本願寺や本願寺中興の祖である蓮如上人廟の管理は、東西両本願寺で明治時代まで争論が続いたが、西本願寺系の西宗寺が執行していた。蓮如上人墓の絵図が奥田家に残ることは、その総代として管理の一翼をになってきたことを示している。以上から、山科本願寺が現在まで一部とはいえ良好に保存されてきたのは、御本寺に居住し、御本寺や蓮如上人墓の管理の一翼をになってきた奥田家の存在が欠くべからざるものであることを示している。奥田家の本質的な価値として、近世山科の宗教的な紐帯であった西宗寺と三之宮の総代を努め、本願寺領として、また禁裏御料としての山科本願寺の跡地と一体的に歴史を経てきたことである。以上のことから、奥田家住宅を史跡山科本願寺跡及び南殿跡の「重要な構成要素」として一体で保存することが重要である。

(馬瀬智光)

註

- 41) 「西宗寺文書」『史料京都の歴史第11巻 山科区』京都市, 1988。
- 42) 「奥田(甲)家文書」『史料京都の歴史第11巻 山科区』京都市, 1988。
- 43) 「西野村」『史料京都の歴史第11巻 山科区』京都市, 1988。
- 44) 『“京都を彩る建物や庭園” 認定候補調査報告書 奥田家』NPO法人古材文化の会, 伝統建築保存・活用マネージャー会, 2013。
- 45) 註44文献の「5. 奥田家の古文書と建築年代の考察」。
- 46) 註44文献の「5. 奥田家の古文書と建築年代の考察」。
- 47) 註43文献の198頁。
- 48) 註44文献の「(4) 評価」。

3. 山科本願寺の城郭史的位置付け 現状とこれから

土塁について

山科本願寺跡の土塁が城郭史の中でどのような位置を占めるのであろうか。京都盆地を取り巻く山々に築かれた山城跡を除くと、平城跡で土塁の残存しているものは少ない。平城跡では山科本願寺跡を除くと、成立年代の古い方から、上中城跡、石見城跡、御土居跡、伏見城跡程度である。上中城跡は、^{てんにん}天仁年中（1108～1110）に北面の武士である^{くろろどのたいふ}蔵人大夫正平の^{まつえいくろうくにぎね}末裔九郎国眞によって上中の地に築かれたという伝承をもち、土塁や堀が良好に残っていることから、京都市指定史跡となっている⁴⁹⁾。この城は、平地に築かれる城の形としては非常に珍しい楕円形をしている。周囲には幅5m、深さ1mの堀が廻り、城内の北端部にだけ基底部の幅5m、高さ1.8m、長さ20mの土塁が築かれている。

石見城跡は、山科七郷と同様に、中世の京近郊にあって勢力を誇った西岡衆である小野氏が築いた城とされている。この城の北辺及び西辺には二重の土塁が残存しており、令和3年度から城の規模と構造を正確に把握するために調査を開始したところである⁵⁰⁾。これら2城は、山科本願寺跡に残る土塁とは規模が大きく異なる。比較対象として、図121では、修学院雲母城跡、一乗寺山城跡、如意ヶ嶽城跡の3城に残る土塁の断面を載せている。修学院雲母城跡は比叡山への登山道の一つ「雲母坂」沿いにある山城であり、一乗寺山城跡も比叡山に至る別の登山道沿いにある山城である。如意ヶ嶽城跡は、京と近江（現在の滋賀県）を結ぶ道である「如意越え」沿いにあり、平安時代創建の如意寺跡とは堀切で隔てられている。これら山城にある土塁は、基底部の幅が2～6m、高さは1～2m程度と小規模なものであり、堀切や空堀とセットになることで防御性を高めている。山という地形の高低差や山の斜面そのものも防御に使う山城と平城では防御のあり方そのものが異なるが、山科本願寺跡の土塁とは規模が大きく異なることがわかる。

一方、山科本願寺跡の土塁は、基底部幅が15m～30m、高さ5～10mあり、土塁の上部は移動が可能のように幅が2～3mある。しかも、土塁とその外側をめぐる堀は、各所で屈曲しており、それまでの方形居館の正面からの敵に相対する単純なものから、側面からの攻撃も可能とする「横矢掛り」を意識した構造となっている。

御土居（洛中総構）と伏見城跡の総構の土塁は、高さの相違は少ないものの、基底部の幅が格段に大きくなっている。御土居は場所によって規模が大きく異なるが、北区鷹峯2番地にある土塁は基底部の幅が22m、高さが5m、堀底からの比高は約8mある。山科本願寺跡の土塁と同様、御土居の上端部も幅6m程度の平坦な部分があり、台形状をなしている。

伏見城【木幡山城期】の防御の基本は水を湛えた濠と石垣であるが、北側には総構の土塁が現存している。断面図は、JR奈良線の複線化工事に伴って行われた調査に基づくものである。基底部の幅は60m以上、高さは上部が削られている可能性があるものの約6mあり、性質の異なる構築土を使用して造られている⁵¹⁾。

御土居と山科本願寺跡の土塁の規模に大きな違いはないものの、伏見城跡の総構土塁は、基底

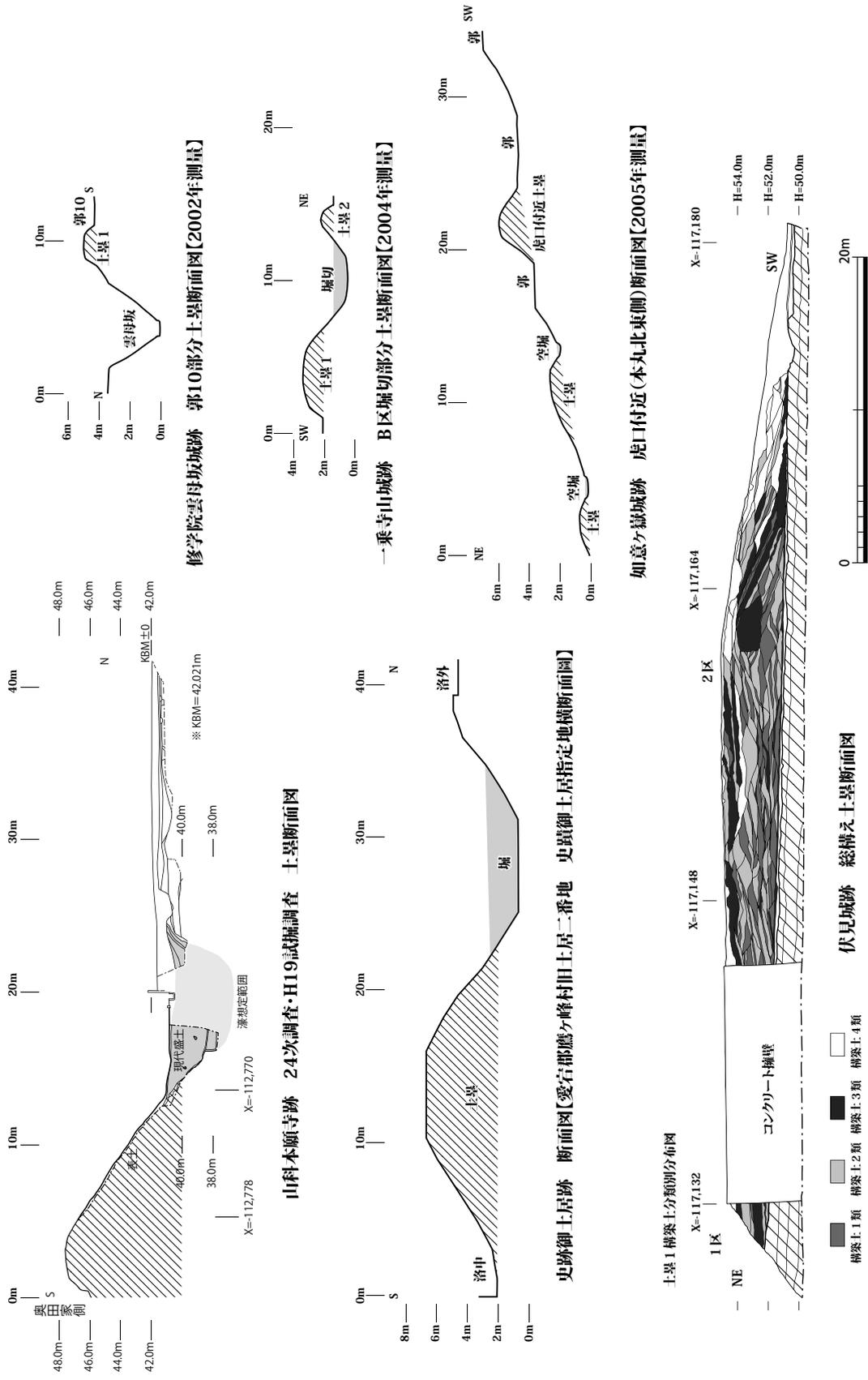


図120 土塁断面比較図(1:400)

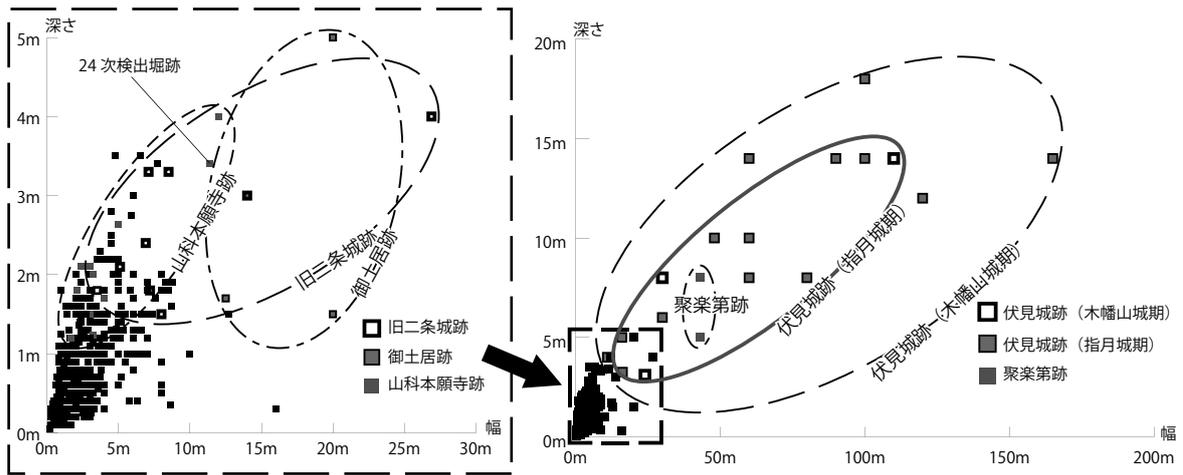


図121 京都市内城郭 堀の幅と深さの相関図
 (左図は、聚楽第跡、伏見城跡【指月城期・木幡山城期】のデータを除く)

部の幅が2～4倍大きい。しかし、伏見城が天下普請で造られたこと、築城技術が著しく発展していく織豊期の所産であることを考えると、伏見城が造られる半世紀も前の山科本願寺跡の土塁の規模や、横矢掛りを備えている点は、城郭史上、その先進性から京都市内だけではなく全国的な視野で見ても特筆すべき特徴を有している。

堀の規模から見た特徴

洛中・洛外の堀（濠）及び集落跡の周囲をめぐる区画溝で幅と深さのわかる155遺跡、655例（図121）の中で、幅が10mを超えるものは山科本願寺跡の2例（幅11.4m、幅12.0m）の他には、29例しかない。平安京の朱雀大路が河川化したもの（幅10.0m）、大藪遺跡の1例（幅16.0m）を除くと、旧二条城跡【武家御城、公方様御構】、聚楽第跡、伏見城跡【指月城期】、伏見城跡【木幡山城期】の5遺跡に集中している⁵²⁾。

655例の平均は、幅4.4m、深さ1.08mであり、大半の堀は幅が6.0m未満になる(574例、87.6%)。山科本願寺跡で検出された堀も6m未満がほとんどである。しかし、先述の幅10mを超える2例はいずれも御本寺を守る堀であり、一つは24次調査で幅が明らかになり、もう一つは天文元年(1532)に落城の原因となった「水落ち」の想定場所である。

図121の分布を見てもわかる通り、織豊期のものを除くと、山科本願寺跡の分布域が突出して大きいことがわかる。また、この図から、土塁の規模では顕著な差のなかった御土居は堀の規模では山科本願寺跡とその分布域を異にしていることも明らかとなった。堀の規模から見ても、山科本願寺跡は先進的な特徴を有していることがわかる。

まとめ

山科本願寺跡の城郭史的な位置付けをまとめると、土塁の規模が半世紀後の織豊期の土塁よりも若干小規模であることを除くと、基底部の幅、土塁の高さとも同時期では傑出している。また、相対する敵に対して側面からの攻撃を可能とする横矢掛りを多用している。堀についても織豊期の城郭を除くと、幅と深さとも同時期では傑出した規模を有している。さらに、「御本寺」「内寺内」「外寺内」の三重構造を有し、それぞれに堀と土塁を有すること、南北約800m、東西540mとい

う規模そのものが一般的な平城の規模（一町四方：約 100m 四方，ただし，京内では 120m 四方）とは隔絶している。

以上から，山科本願寺跡は織豊期以降の城郭を除くと，規模・構造とも先進的かつ大規模であり，日本の城郭史を考える上で極めて重要な価値を有している。

（馬瀬智光）

註

49) 馬瀬智光『京の城－洛中洛外の城郭－』京都市文化財ブックス第 20 集 京都市，2006。

50) 註 49 文献。

51) 中谷正和『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-3 （公財）京都市埋蔵文化財研究所，2017。

52) 馬瀬智光・熊谷舞子・新田和央・北野信彦・古川匠『指月城跡・伏見城跡発掘調査総括報告書』京都市文化市民局，2021。

版 圖



1 23次 1区全景（東から）



2 23次 1区断割り西壁断面（北東から）

図版2 山科本願寺跡23次 遺構



1 23次 2区全景（北西から）



2 23次 2区断割り東壁断面（北西から）



1 23次 土坑1・2半裁状況（北東から）



2 23次 柱穴33断面（北西から）



3 23次 柱穴40断面（南から）



4 23次 土坑42検出状況（南から）



5 23次 調査区と現存土塁（東から）



1 23次 現存土塁切り通し東側オルソ写真(西から)



2 23次 現存土塁切り通し西側オルソ写真(東から)



1 23次 現存土塁切り通し西面（北東から）



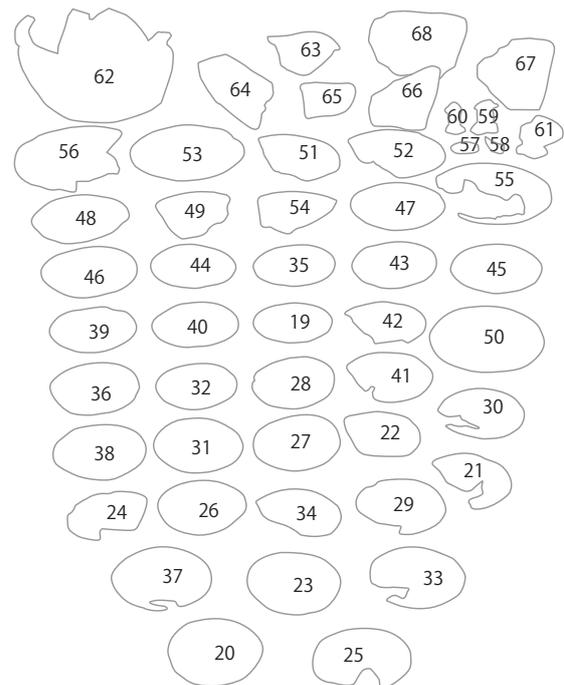
2 23次 現存土塁切り通し西面遺物出土状況（東から）



3 23次 出土遺物1（69～74）



4 23次 出土遺物2（62）



5 23次 図版6 土坑42出土遺物報告番号対応図



1 23次 土坑42出土遺物 (19~68)



1 24次 1区土塁断面1 (北西から)



2 24次 1区土塁断面2 (北西から)



3 24次 1区土塁基底部断面 (北西から)

図版8 山科本願寺跡24次 遺構



1 24次 3区土塁検出状況（南東から）



2 24次 3区土塁検出状況（北西から）



3 24次 3区土塁断面状況（北西から）



4 24次 2区検出状況（北西から）



1 24次 1区土塁断面オルソ写真(西から)

2 24次 3区土塁断面オルソ写真(西から)

図版10 山科本願寺跡25次 遺構



1 25次 調査区遺構検出状況（北東から）



2 25次 拡張区1 遺構検出状況（東から）



1 25次 調査区東壁及び断割り断面状況（南西から）



2 25次 井戸17断面状況（東から）

図版12 山科本願寺跡25次 遺構



1 25次 調査区西壁断面状況（北東から）



2 25次 調査区西壁断面状況（北東から）



3 25次 調査区遺構検出状況（北東から）



4 25次 整地土断面及び井戸検出状況（南東から）



5 25次 井戸17北肩検出状況（南東から）



6 25次 土坑8断面状況（南東から）



7 25次 土坑9断面状況（南から）



8 25次 拡張区2整地土検出状況（北西から）



1 27次 1区全景（南から）



2 27次 土坑1（北から）



3 27次 土坑1断面状況（北から）



4 27次 柱穴4断面状況（北から）

図版14 山科本願寺跡27次 遺構



1 27次 柱穴6断面状況（北から）



2 27次 土坑7断面状況（北から）



3 27次 1区西壁断面状況（南東から）



4 27次 1区西壁断面状況（東から）



5 27次 2区全景（北から）



1 27次 2区西壁断面状況（南東から）



2 27次 2区西壁断面状況（東から）

図版16 山科本願寺跡27次 遺構



1 27次 2区西側拡張区（北東から）



2 27次 2区西側拡張区断面状況（北東から）



3 27次 土坑22遺物出土状況（東から）



4 27次 3区全景（北東から）



5 27次 3区西壁断面状況（南東から）



1 27次 土坑7出土遺物



2 27次 土坑22出土遺物

図版18 山科本願寺跡



1 調査地と史跡指定地土塁（南西から）



2 奥田家北側残存土塁（北東から）



1 史跡公園（北から）



2 史跡公園残存土塁と奥田家西側の残存土塁（南東から）

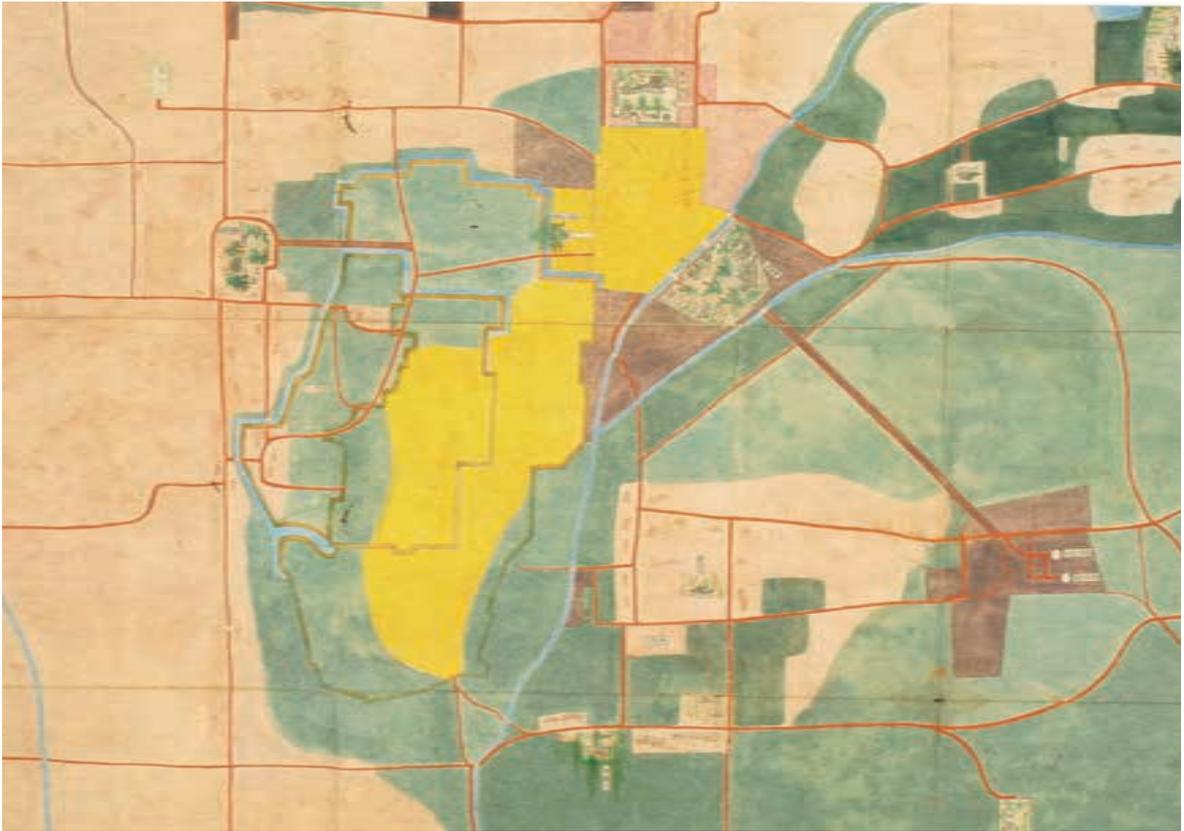
図版20 山科本願寺跡



1 各調査地と残存土塁（南西から）



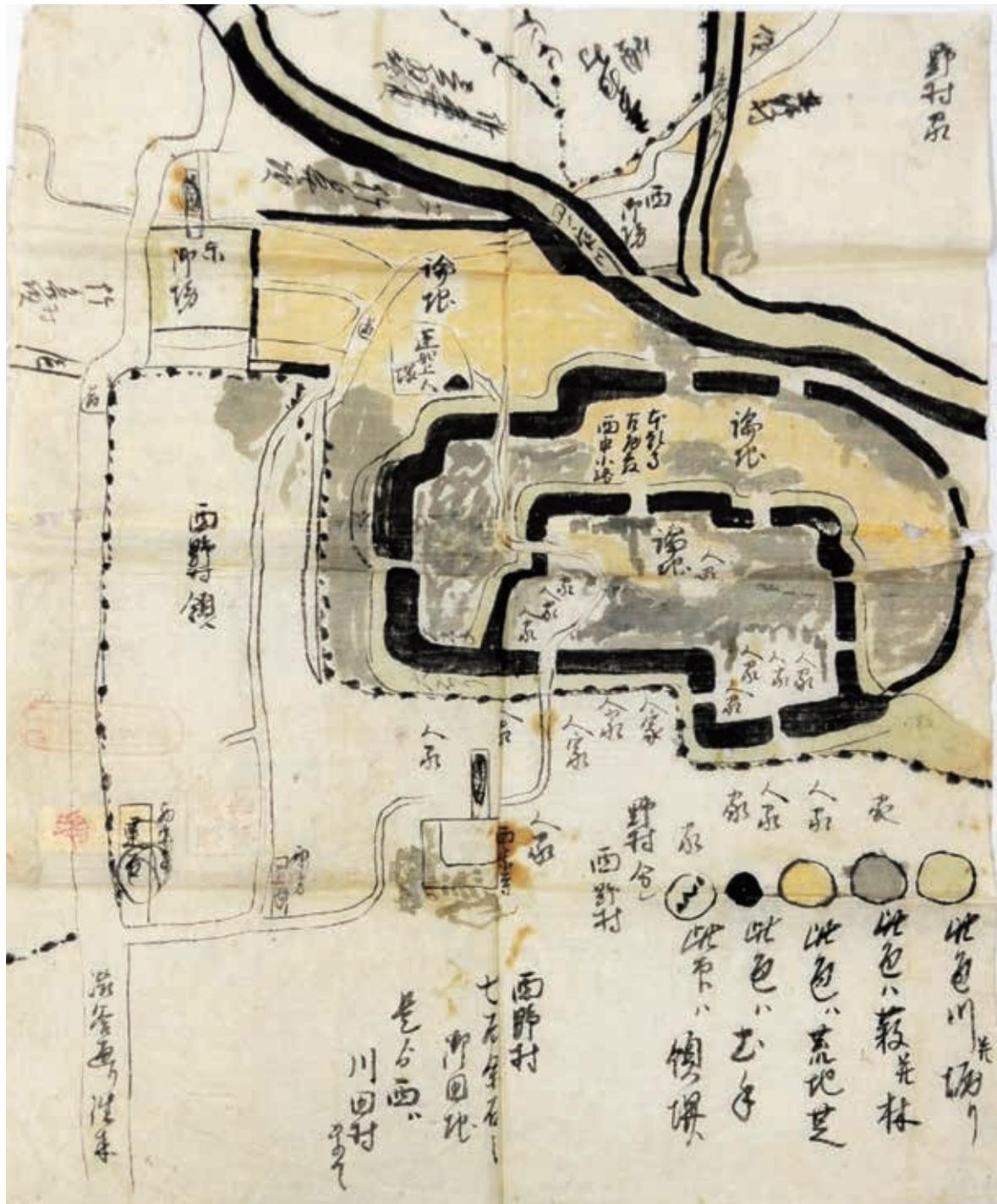
2 23・25・27次調査地（南西から）



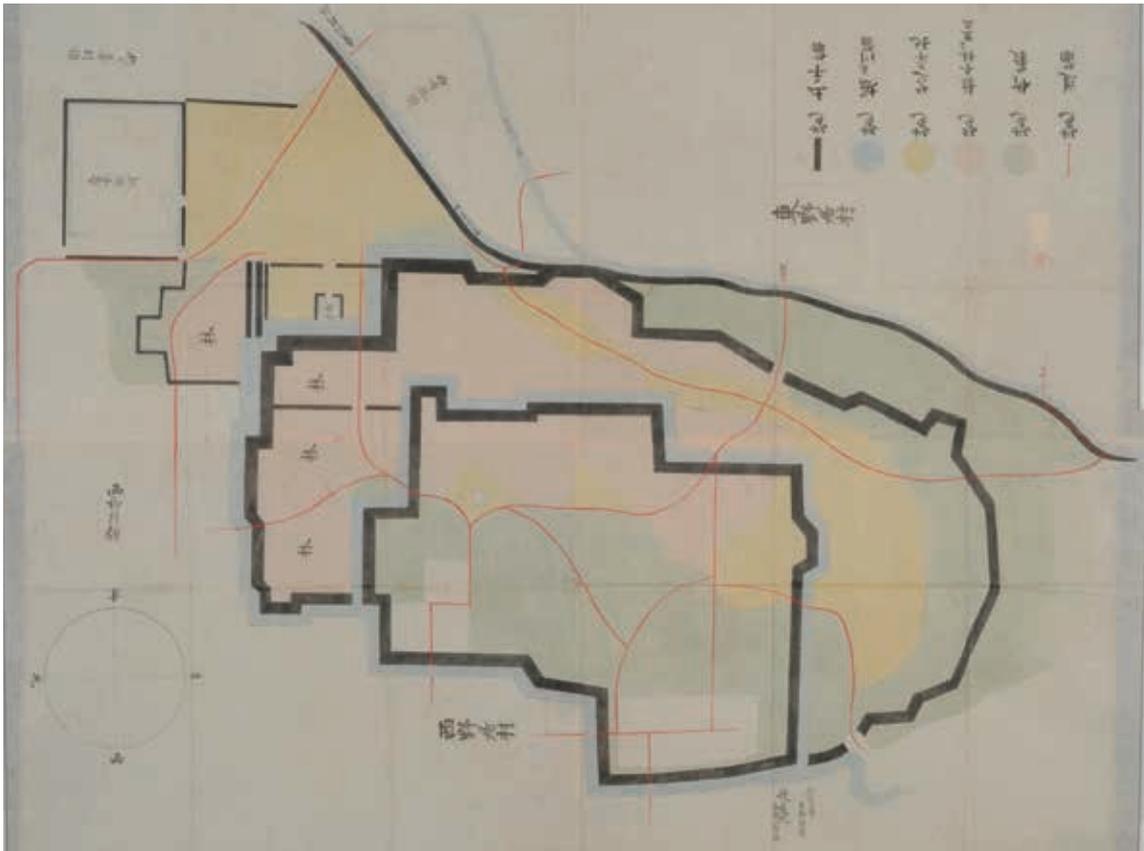
1 山科古図 (京都府立洛東高等学校蔵)



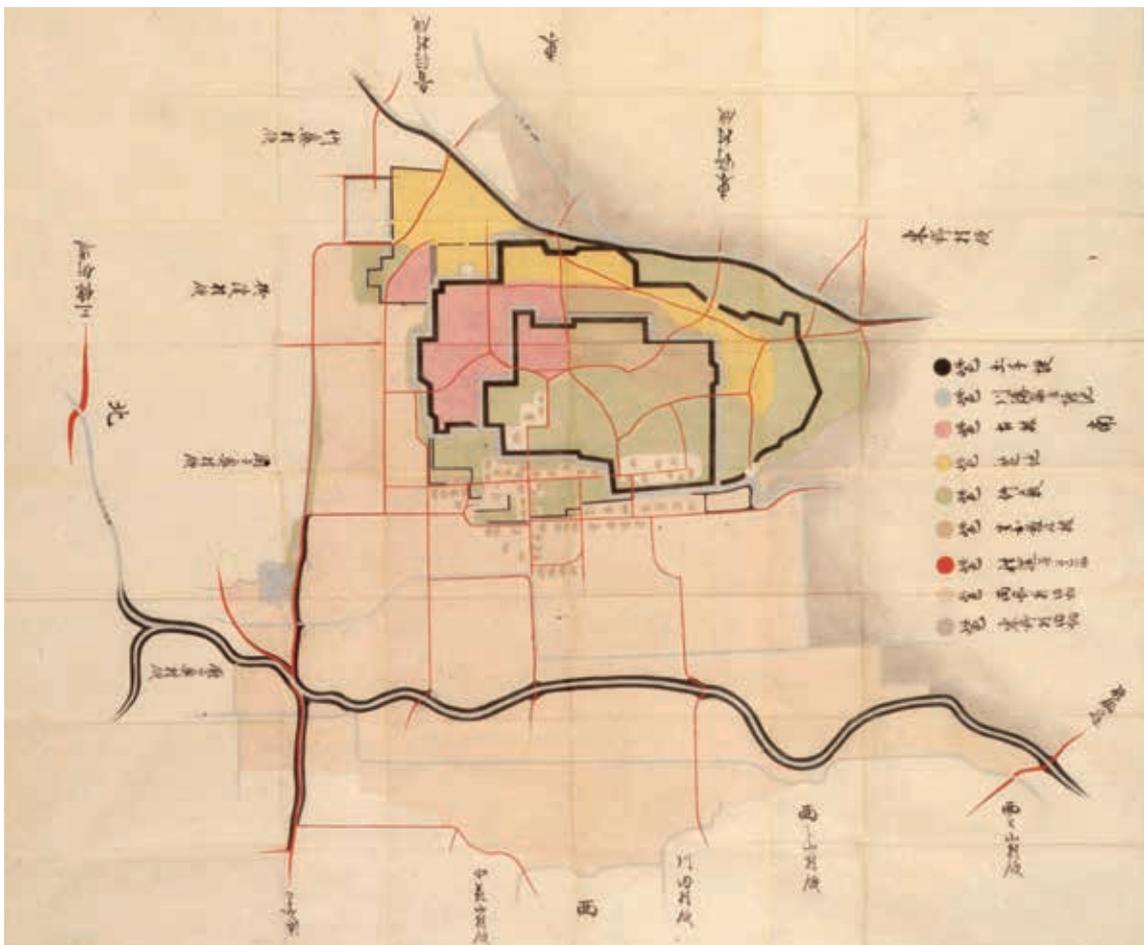
2 野村本願寺古屋敷之図 (光照寺蔵)



1 山科本願寺旧迹論地図 (大谷大学博物館蔵)



1 山科本願寺旧跡図 (大谷大学博物館蔵)

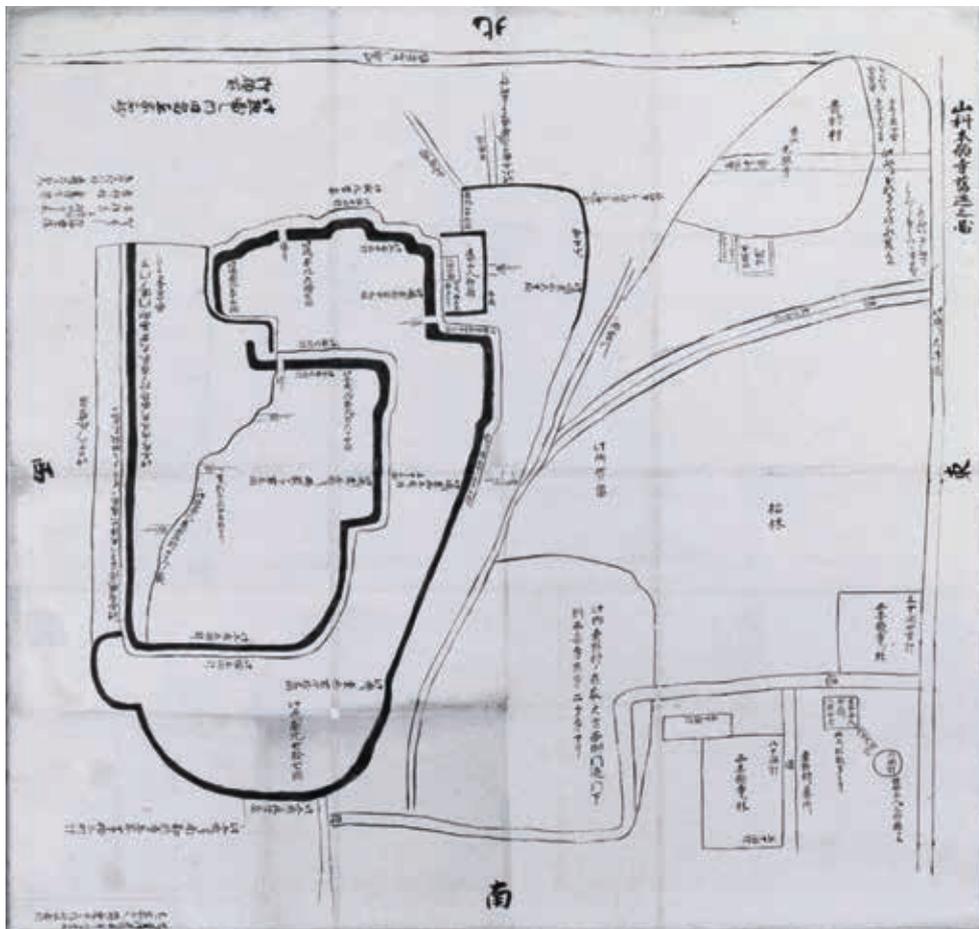


2 山科本願寺旧迹絵図 (大谷大学博物館蔵)

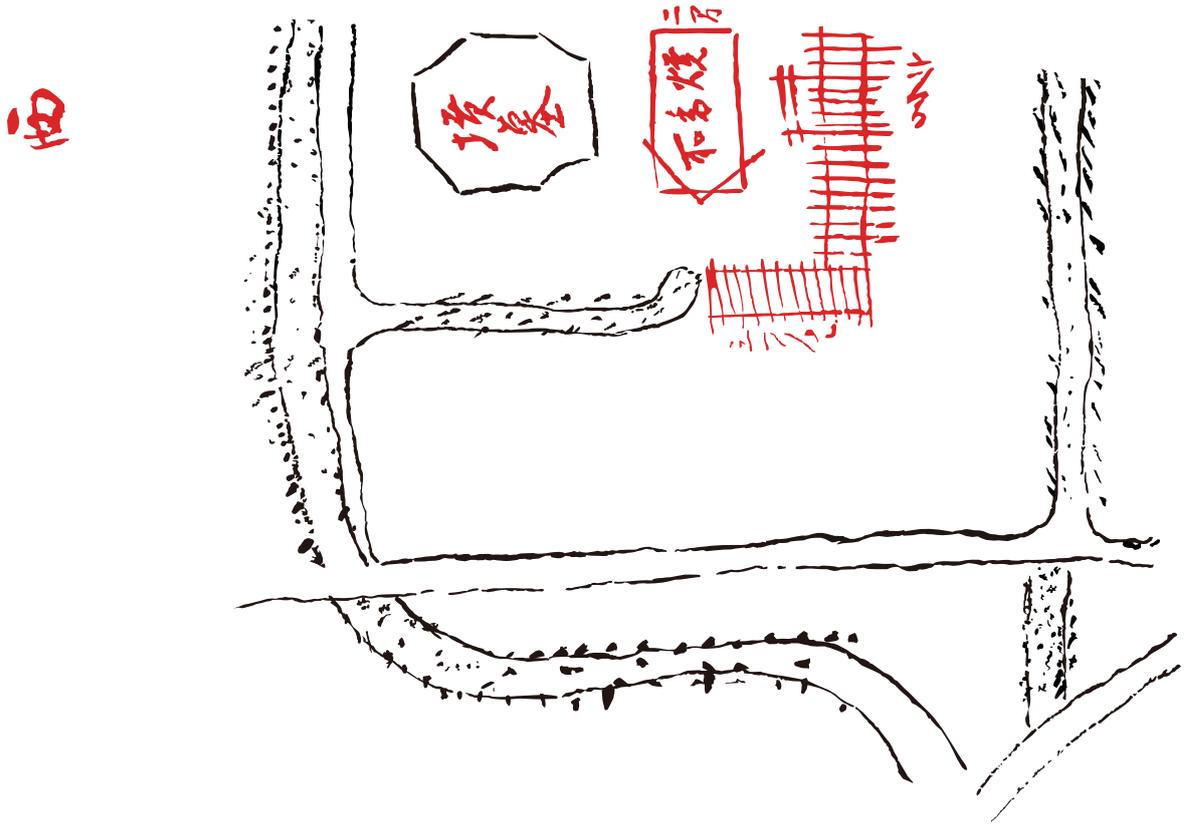
図版24 山科本願寺跡 絵図



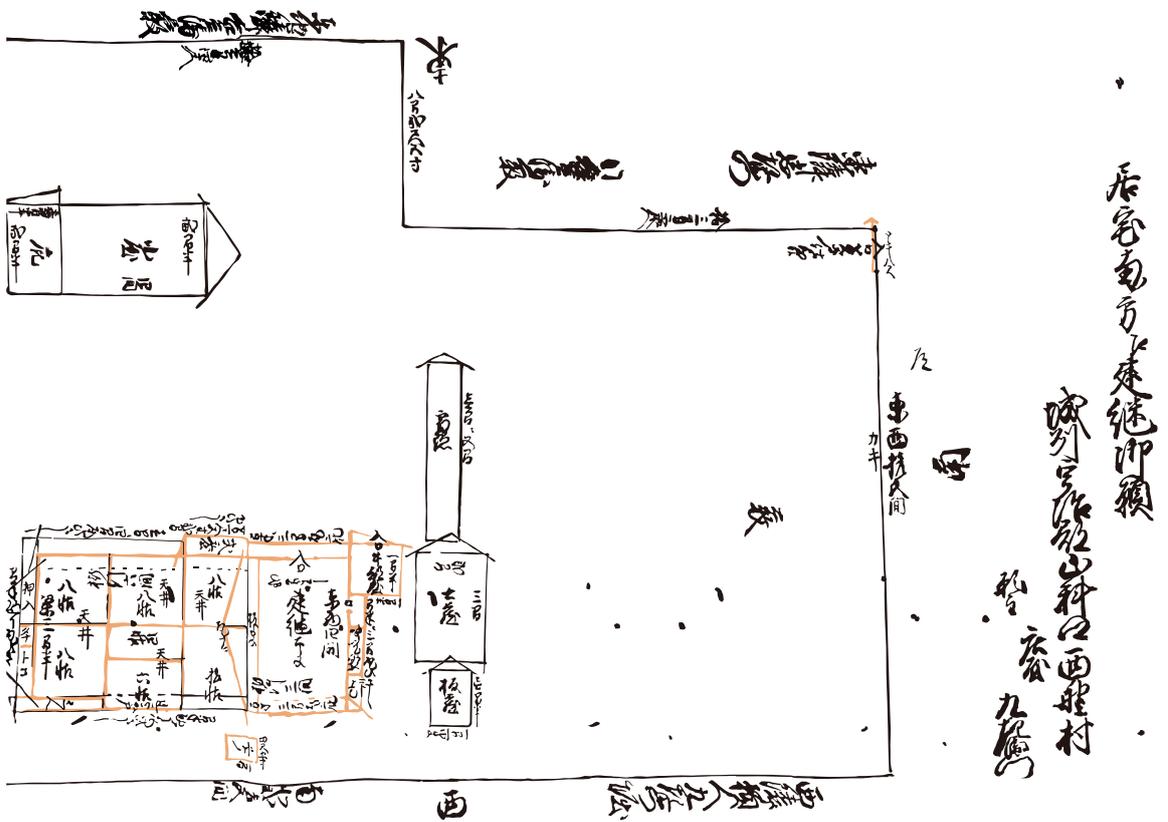
1 山科本願寺旧跡図 (大谷大学博物館蔵)



2 山科本願寺旧迹之図 (大谷大学博物館蔵)

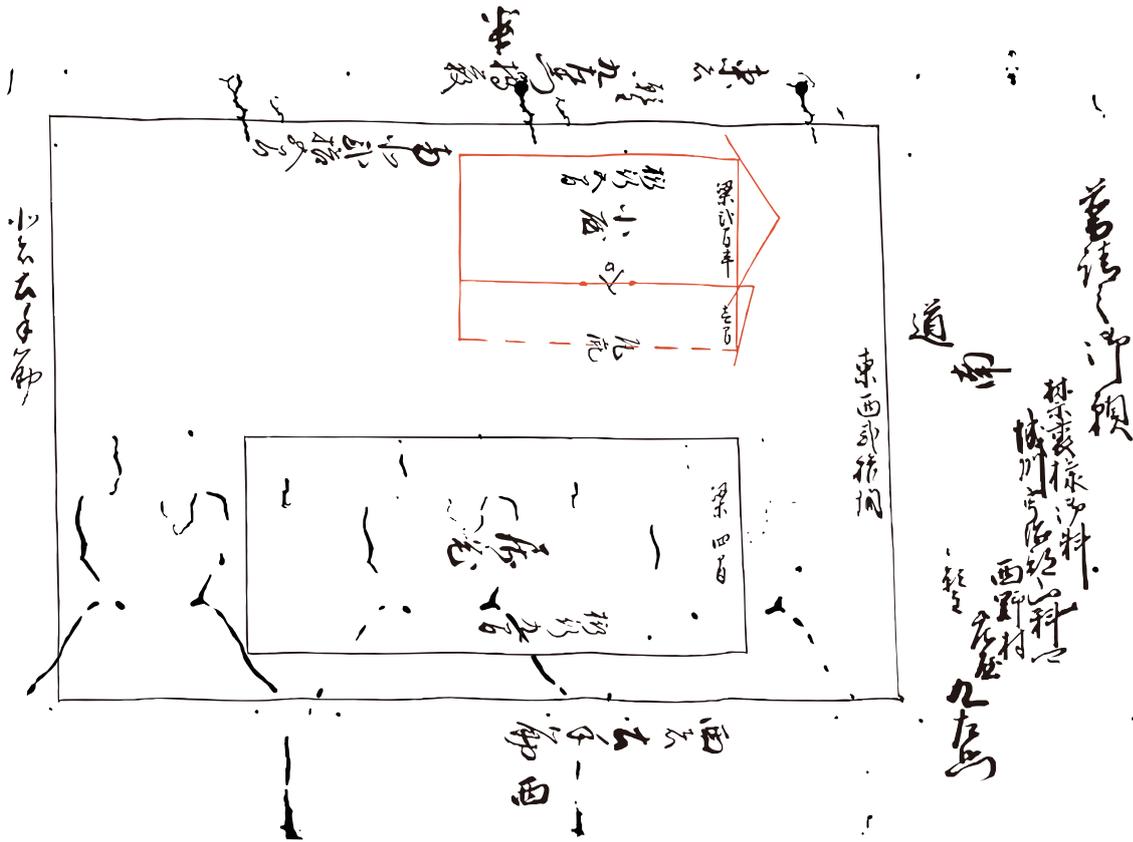


1 「墳墓図」トレース図（『奥田家文書』）

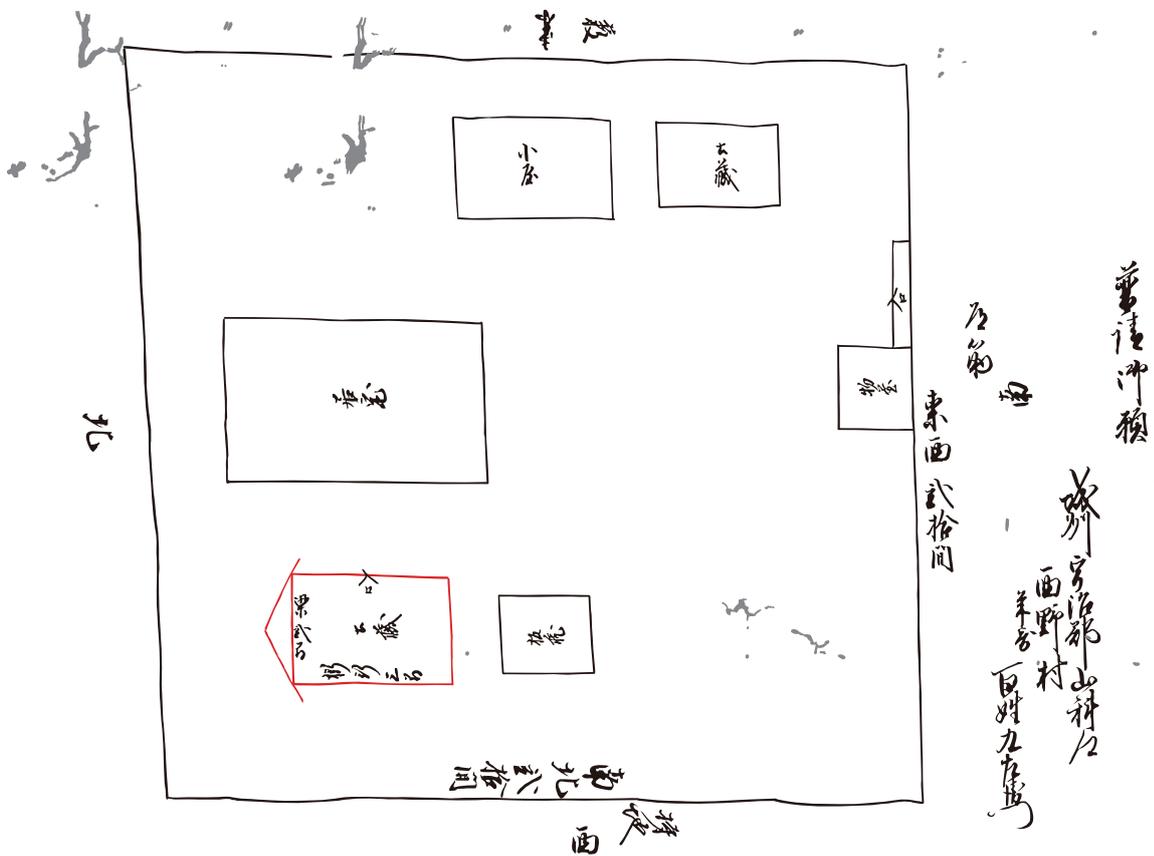


2 「普請願書 明和6年（端裏書）」トレース図（『奥田家文書』）

図版26 山科本願寺跡 絵図



1 「普請願書 天明5年（小屋普請）」トレース図（『奥田家文書』）



2 「普請願書 寛政10年（土蔵普請）」トレース図（『奥田家文書』）

報告書抄録

ふりがな	やましなほんがんじあと はくつちようさそうかつほうこくしょ							
書名	山科本願寺跡 発掘調査総括報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・奥井智子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488 分庁舎地下1階							
発行所	京都市文化市民局							
発行年月日	西暦2022年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やましなほんがんじあと 山科本願寺跡 (じないちよういせき) (寺内町遺跡)	きょうとしやましなく 京都市山科区 にしのさんかいちよう 西野山階町 37-2, 37-6 地内	26100	626	34度 58分 59秒	135度 48分 33秒	2018年12月 3日～2018 年12月27日	717㎡ (71㎡+ 土塁測量部分 646㎡)	範囲確認
	34度 59分 00秒			135度 48分 33秒				
	きょうとしやましなく 京都市山科区 にしのさんかいちよう 西野山階町 36-2, 38-1, 51			34度 58分 59秒	135度 48分 32秒	2019年12月 9日～2019 年12月19日	30㎡	範囲確認
	きょうとしやましなく 京都市山科区 にしのさんかいちよう 西野山階町44			34度 58分 58秒	135度 48分 35秒	2020年6月 1日～2020 年6月30日	64㎡	範囲確認
きょうとしやましなく 京都市山科区 にしのさんかいちよう 西野山階町44	34度 58分 57秒	135度 48分 35秒	2021年8月 30日～2021 年9月29日	56㎡	範囲確認			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
山科本願寺跡 (寺内町遺跡)	寺院跡	室町時代	溝, ピット, 井戸, 土坑, 整地土, 土塁	土師器, 須恵器, 瓦質土器, 陶器, 陶磁器, 丸瓦, 平瓦, 金属製品	蓮如上人が造営した 山科本願寺の中核部 である「御本寺」の北西 部を主に, 4か年にわ たって調査を実施した。			

山科本願寺跡 発掘調査総括報告書

発行日 2022年3月31日
発 行 京都市文化市民局
編 集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
住 所 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
分庁舎地下1階
TEL : (075) -222-3130

印 刷 洛東印刷株式会社
TEL : (075) -501-1010

